

平成 2 2 年 度

事 業 報 告 及 び 決 算 書

公益財団法人 音楽鑑賞振興財団

## 目 次

平成 2 2 年度事業報告書	・ ・ ・ ・ ・ 1
I. 収支概況報告	・ ・ ・ ・ ・ 1
II. 事業ごとの報告	
1. 研 究 事 業	・ ・ ・ ・ ・ 3
2. 助 成 事 業	・ ・ ・ ・ ・ 4
3. 普 及 事 業	・ ・ ・ ・ ・ 6
4. ソフト開発事業	・ ・ ・ ・ ・ 8
5. 出 版 事 業	・ ・ ・ ・ ・ 9
6. 松本記念音楽迎賓館	・ ・ ・ ・ ・ 1 0
平成 2 2 年度決算書	・ ・ ・ ・ ・ 1 1

## 平成22年度 事業報告書

「財団法人音楽鑑賞教育振興会」は、「パイオニア音楽鑑賞教育振興会」として事業を開始してから43年、財団法人の許可を得てから38年目となる平成22年度の事業活動を終了した。

当期は新制度に基づく公益法人移行に向けて取り組むことになり、平成22年6月開催の理事会及び評議員会で新定款を承認した後、諸準備を整えて平成22年11月19日に、内閣府に移行認定申請をかけるにいった。従来から行なっている学校教育分野での事業活動はもちろん、より広く、より多くの人たちに音楽の素晴らしさを味わってもらうための普及活動や、財団が事務所を置く松本記念音楽迎賓館の有効活用などを4つの公益目的事業と1つの収益事業に区分しての申請であった。

この申請は、平成23年2月に公益認定等委員会へ諮問され、その答申を受けた内閣総理大臣より、平成23年3月22日に公益財団法人としての認定を受けることができた。これにより、当財団は平成23年4月1日から名称を改め、「公益財団法人音楽鑑賞振興財団」として新たなスタートを切るにいった。

今後は、公益に資する財団として、より一層大きな責任と自覚をもって活動を進めていくが、ここに平成22年度の事業活動を総括する。

### I. 収支概況報告

当期は、8070万円もの事業運営基金を取り崩して財団活動を行なう事業計画及び収支予算を組んで臨んだが、予算を上回る運用益があったことに加えて、期中に不要不急の費用見直しを行ない効率的な運営に努めた結果、収支上の不足額は、実際には3862万円であった。

収入としては、まず、支援企業であるパイオニア株式会社から予算どおり寄付金2000万円を得た。保有するパイオニア株式会社に対する配当収入は当期も予算どおりゼロであった。運用収入及び雑収入の合計は、保守的にみていた予算額の100万円を大きく上回る1822万円の収入となった。事業収入は、予算の1710万円に対して、松本記念音楽迎賓館の利用料が予算を下回ったことが主要因で、1484万円の実績となった。従って収入の合計は5306万円であった。

支出に関しては、期初に設定した事業活動をほぼ予定どおりに進める一方で、効率的な運営が功を奏し、総額1億1880万円の予算に対して、9168万円の支出で収まった。

事業費は、予算の8830万円に対して7901万円の実績であったが、全事業で費用をうまく管理しながら効果的に活動することで、当財団が果たすべき事業を行なうことができた。開発事業の教材開発に関しては、市場環境を考慮した結果、翌期以降に先延ばししたために250万円あまりの額が未使用となった。

管理費は、予算の2950万円に対して実績は1157万円となった。人件費で、予定していた人員構成にいたらなかったため、予算に対して750万円あまりの減額となった。管理経費では、予算に対して1000万円を超える減額となったが、これは予算に計上した事務所賃借料の720万円が実際には発生しないため、決算に含めなかったことが主要因である。広報活動費は、期中の費用見直しが利いて、予算に対して120万円の節約となった。なお、他事業活動支出として備品関係で110万円を計上している。

正味財産増減計算書では、上記の当期収入がそのまま経常収益計の5306万円となる一方で、経常費用は、上記の支出合計9168万円に加えて減価償却費（338万円）を計上する他、棚卸し損（商品減少額22万円）と事業外活動費として固定資産評価損（土地評価損960万円）及び固定資産除却損（3万円あまり）を計上して、経常費用合計は1億384万円となった。

この結果、当期正味財産減少額は5078万円となり、正味財産期末残高は19億3406万円となった。この財産を平成23年度の期首残高として、新しい公益財団法人としての活動の源とすることになる。

以下、それぞれの事業について平成22年度の活動詳細を報告する。

## II. 事業ごとの報告

### 《研究事業》

#### 1. 研究

##### (1) 研究委員会

新学習指導要領の趣旨に添った「音楽鑑賞の指導」について、指導の考え方と具体的な事例をまとめた。また、第3回「夏の勉強会」、第8回「新・冬の勉強会」において研究の成果を提案した。

##### (2) 主催講習会の企画

7月の「第3回夏の勉強会」、12月の「第8回新・冬の勉強会」について研究事業主管のもと研究委員会委員の意見を参考にして、講習内容の企画、構成を行なった。

###### ①第3回「夏の勉強会」の企画

新学習指導要領の考え方に基づく指導法として、「授業展開のポイント」に焦点をあて講義と演習で企画構成した。演習をすることによって受講者がより理解できるように、少人数制のグループ研修で内容を企画した。

※ 研修の内容等詳細は6頁「普及事業の1項、主催講習会」の項に記載。

###### ②第8回「新・冬の勉強会」の企画

音楽科教育の今日的課題をとらえ、新学習指導要領に沿った鑑賞領域の指導のあり方、これからの学習評価について、講演と実践提案、ワークショップで勉強会を構成した。

※ 研修の内容等詳細は7頁に記載。

##### (3) 資料室

###### ①利用状況

財団が保有する音源や研究資料を、予約制で利用希望者を受け入れた。

利用料金は1日を3時間単位で3ブロックに区切り、1ブロック利用者1人あたり500円の設備利用料を徴収、季刊誌購読者は購読特典として利用料を無料とした。

平成22年度の利用者累計は101名（昨年度は114名）で、小中学校の現職教員が多く、各地区の研究会単位での利用もあった。利用目的は、指導案作成や授業で活用するための教材研究の利用が多い。

###### ②新規購入資料

今年度は研究委員会として必要な資料を、書籍を中心に購入した。

#### 2. 調査

新学習指導要領実施状況の調査を行う予備調査として、季刊誌の特集テーマと関連を持たせたアンケート調査を2回実施した。

- ・ 鑑賞領域の指導の時数に関するアンケート
- ・ 鑑賞領域の評価に関するアンケート

調査方法は、いずれもONKANウェブネット、音鑑（当財団の略称）が後援する研修会で実施し、それぞれ約150名の回答を得た。集計結果は考察とともに、季刊誌に掲載した。

## 《助成事業》

### 1. 選考委員の委嘱

助成事業実施にあたる選考委員は本年度改選され、次の6名に任期2年間で委嘱した。

小原光一 選考委員長／財団常務理事

小栗 洋 全国高等学校長協会事務局長／全国高等学校長協会元会長

寺崎千秋 (財)教育調査研究所研究部長／全国連合小学校長会元会長

山浦勝雄 東京都江戸川区立葛西第三中学校長／全日本中学校長会会計部長

吉田時雄 聖徳大学元講師

渡邊學而 音楽評論家／財団理事

(職名は平成23年3月31日現在、敬称略)

### 2. 第43回 論文・作文募集

作文募集は学校教育において“広く遍く直接”参加できる公募事業であり、昨年度までに募集方法やテーマの変更、教育現場の事情等から激減した応募数を回復することを課題に、経費を絞りながらも次の取り組みを行った。

- ・ 作文テーマの対象を、学校の授業での鑑賞体験から、学校を含んだ日常生活における鑑賞体験へと範囲を広げ、児童・生徒が作文に取り掛かりやすいように配慮。
- ・ 掲示用ポスターを全国の小・中・高等学校約39,000校に配布(普及活動事業として実施)。
- ・ 入選予定人数・校数を昨年度の倍以上に増加。
- ・ 昨年度は休止した参加者全員への参加記念品贈呈を再開。

これらの取り組みにより、本年度は応募総数で5年ぶりに10,000件、応募校数で3年ぶりに200校を超え、その効果がみられた。59校87名が入選した。

研究助成は、募集対象を小・中・高等学校教員だけでなく大学における研究者にまで広げ、募集内容も研究計画だけでなく研究に関わる調査実施計画も可とした。2件の応募があり、1グループが入選した。

#### ①募集テーマ

- ・ 作文の部 「聴いてみつけた音楽の楽しみ」
- ・ 研究助成の部 「豊かな感性の育成を目ざす音楽鑑賞教育の研究」に関連の深いもの

#### ②募集方法

全国の小・中・高等学校約39,000校に掲示用ポスターを配布。また、ONKANウェブネットや季刊音楽鑑賞教育、メールマガジンなどを通して応募を呼びかけた。

#### ③実施日程

募集期間：平成22年 6月 1日～ 9月30日

審査選考：平成22年10月 5日 第1回審査委員会

10月 6日～11月15日 各部門別審査・第2回審査委員会

11月16日～11月26日 最終選考・選考委員会

入選発表：平成22年12月 1日 ONKANウェブネット及び郵送通知

④応募状況

\*総数は校内応募総数、送付数は財団への応募数

	第 43 回		第 42 回		第 41 回	
	総数	送付数	総数	送付数	総数	送付数
研究助成の部	2	2	2	2	3	3
小学生の部	3,806	607	1,533	195	2,693	368
中学生の部	5,062	503	3,315	177	4,182	301
高校生の部	1,235	85	483	45	755	62
作文の部 計	10,103	1,195	5,331	417	7,630	731
(応募校数)	242	242	74	74	132	132

⑤入選数内訳 (入選者名は「季刊音楽鑑賞教育」V o 1. 4に掲載済)

研究助成の部	入選 1 研究助成金 4 4 万					
作文の部	最優秀賞	優秀賞	佳作	努力賞	入選計	パイオニア賞
小学生の部	1名	2名	6名	28名	37名	27校
中学生の部	1名	2名	6名	24名	33名	22校
高校生の部	1名	2名	3名	11名	17名	10校
作文の部 計	3名	6名	15名	63名	87名	59校
作文の部 副賞	AV 機器・ヘッドホン (複数製品から入選者が選択)					ブルーレイディ スクプレーヤー

\*研究助成金額は提出された予算書に基づき選考委員会で決定

⑥審査基準

- ・研究助成の部： 学校における音楽鑑賞指導の実践を推進していくための研究計画や、研究に関わる調査の実施計画であり、内容の方向性が財団の研究に合致するもの、その成果が今後の音楽鑑賞教育にとって有益なものとなると期待されるものを選考
- ・作文の部： 音楽を聴く楽しみや喜び、感動などを感じたまま素直に表しているもの、音楽的な根拠をもとに自分の想いを表現しているもの、学校の鑑賞の授業で学んだこととの関連が作文中に表れているものを選考

⑦審査委員 計 2 2 名 (委員名は「季刊音楽鑑賞教育」V o 1. 4に掲載)

- ・研究助成の部： 3名
- ・作文の部： 13名 (小学生の部：5名、中学生の部：5名、高校生の部：3名)
- ・審査顧問： 全日本音楽教育研究会 福井直敬 会長

⑧協賛

- ・パイオニア株式会社

⑨後援

- ・文部科学省
- ・全国都道府県教育長協議会
- ・全日本音楽教育研究会
- ・全国連合小学校長会
- ・全日本中学校長会
- ・全国高等学校長協会
- ・財団法人日本私学教育研究所

### 3. 助成研究発表会

平成22年11月18日に全日本音楽教育研究会熊本大会公開授業の中で、授業として研究成果の一部を発表し、平成23年3月に報告書をまとめた。

○熊本県中学校教育研究会音楽部会（平成20年度研究助成の部入選）

主題：豊かな感性の育成を目指す音楽鑑賞指導の研究

～ ICT機器を活用した音楽科指導、電子黒板を使って ～

参加者：約100名

内容：研究主題に迫るために、4つの視点から研究された。

- ① 〔共通事項〕を支えとした学習指導の質的な充実
- ② 思考・判断する過程での他者との交流場面、音楽の共有の場面の設定
- ③ 適切な評価の工夫・改善
- ④ ICT機器の効果的な活用

### 4. 賛助活動

例年通り広告や協賛は、全日本および東京都の小・中・高等学校音楽教育研究会名簿、日本音楽教育学会、日本学校音楽教育実践学会、各ブロックで開催される研究大会プログラムに掲載した。

団体への賛助は主に全日本音楽教育研究会、日本音楽療法学会、財団法人日本オペラ振興会である。

### 5. 海外音楽鑑賞教育視察団の派遣

海外が身近になった時代感覚を受け、視察団の組織化を休止している。

## 《普及事業》

### 1. 主催講習会

「夏の勉強会」、「新・冬の勉強会」とともに研究委員会の企画に沿って実施した。また、「教員免許状更新講習（選択12時間）」としても認可を受けて開催した。

これらの講習会は受益者負担の原則により収支バランスを考えて実施計画を組んだ結果、広報及び事務経費を除いた開催にかかわる直接費は完全に回収できた。

#### ①第3回「夏の勉強会」

研修内容は「新しい音楽鑑賞の指導法」をテーマに、新学習指導要領の考え方に基づく指導法として、「授業展開のポイント」に焦点をあてて研修を実施した。

ア テーマ	子どもたちがよくわかる、新しい音楽鑑賞の指導法
イ 会場	松本記念音楽迎賓館（東京都世田谷区岡本）
ウ 日程	平成22年7月31日（土）～8月1日（日）
エ 内容	・講義「これからの鑑賞領域の学習指導」 ・実践例の提案 ・グループ研修と研修成果の発表
オ 講師	川池 聡 財団研究事業主管、及び研究委員会委員4名

- カ 受講者 42名（小学校教員24名、中学校教員18名）、  
教員免許状更新講習該当者は6名
- キ 参加費 15,000円

## ②第8回「新・冬の勉強会」

音楽科教育の今日的課題をとらえ、新学習指導要領に沿った鑑賞領域の指導のあり方、これからの学習評価について参加者と共に考えることを中心に据えて実施した。なお、第2日目には、「音楽講座」と関連させてジャズのレクチャーコンサートを行なった。

- ア 主 題 これからの音楽科教育を考える
- イ 会 場 国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区代々木）
- ウ 日 程 平成22年12月26日（土）～27日（日）
- エ 内 容
- ・講演「新学習指導要領の趣旨を生かした指導のあり方  
～鑑賞の指導を中心に」
  - ・ワークショップ「鑑賞領域の学習展開のポイント」  
テーマ1：〔共通事項〕を支えとした鑑賞の指導  
テーマ2：言語活動の充実（「言葉で表す」「根拠をもって批評する」  
など）をふまえた鑑賞の指導  
テーマ3：我が国の音楽文化を重視した鑑賞の指導
  - ・実践提案「学習評価の実際」
  - ・講演「これからの学習評価について」
  - ・音楽講座「JAZZ！」
- オ 講 師 全体講師 川池 聡 財団研究事業主管  
講 演 津田正之 文部科学省教科調査官  
大熊信彦 文部科学省教科調査官  
ワークショップ 研究委員会委員7名  
実践提案 入山克巳 茨城県八千代町立西豊田小学校教諭  
高橋宏治 岩手県盛岡市立松園中学校教諭  
音楽講座 中山憲一トリオ及びゲスト  
(職名は平成23年3月31日現在、敬称略)

- カ 受講者 165名（小学校82・中学校53・他30名）  
教員免許状更新講習該当者は25名
- キ 参加費 10,000円（両日参加）、6,000円（1日参加） 資料代込み  
(音鑑誌購読者、おんかん友の会会員、学生には割引特典あり)

## 2. 講習会後援

講習会を計画する各地音楽教育研究会などからの依頼により、希望講習内容にふさわしい講師の紹介とスケジュール調整や資料準備の窓口としての後援を17件行なった。

財団支出は主催者が準備する講師旅費に生じた差額負担がある場合、および東京近郊開催の事務局交通費がその内容である。

平成22年度後援講習会件数内訳

( ) 内は21年度実績

	後援数	小学校	中学校	小・中	参加人数
講習会	17(22)	6(8)	3(4)	8(10)	573(753)

なお、上記に含まれる中で、音鑑が培った鑑賞指導法の具体的な体験研修である音鑑「夏のセミナー」の手法を組み込み、鑑賞指導や教材研究のポイントを新学習指導要領の理解とともに体得するための研修会を、共催という形で2件実施した。

・第3回「近畿 夏の勉強会」

日 程 7月22日(木)～23日(金)

主 催 奈良県中学校音楽教育研究会

・第3回「東海・北陸 夏の勉強会」

日 程 8月23日(月)～24日(火)

主 催 石川県金沢市中学校教育研究会音楽部会

### 3. 普及活動

財団事業の広報、ICTを活用した授業の普及を図ることを目的に行った。

#### ①財団事業の広報

財団事業全般の広報のため、また、論文・作文募集の応募数・応募校数を上げるために、全国の小学校、中学校、高等学校の約39,000校にダイレクトメールを送付した。

その結果、作文の応募総数・応募校数が増加したほか、ONKANウェブネット会員数、書籍の売上等にも効果がみられた。

#### ②ICTを活用した授業の普及

ICT機器の利用を促進するため、各地音研大会での実演展示のほか、ICTを活用した研修会の後援を行ったりすることで、多くの現場教員に対して具体的な活用例を示した。

また、実践例を収集し、季刊誌およびONKANウェブネットでの紹介、その具体例教材をONKANウェブネットのコンテンツとして提供した。

### 《ソフト開発事業》

主にONKANウェブネットの整備と発信するコンテンツの作成を行なった。

また、現在手作業で進めている出版物の販売決済手続きを、オンラインで決済できるように整備を行なった。

#### ONKANウェブネット

流失費用を掛けずに事務局作業の範囲で各種コンテンツを充実させた。

- ・ 季刊誌と連動させ、誌面では対応できない資料を提供。
- ・ 月刊誌掲載記事は著者の許可を取り、ジャンル別にアーカイブしてコンテンツ化。
- ・ 音で示す教材研究資料などウェブの特徴を活用できるコンテンツを制作。
- ・ 授業におけるICT活用提案。
- ・ 各地区音研研究大会など、公的情報を提供。
- ・ ウェブ上でのアンケート調査の実施。

## 《出版事業》

### 1. 季刊『音楽鑑賞教育』の発行

本年度はVol. 1～4を発行した。

特集にして各号完結するかたちで提供し、指導案やワークシートなど授業実践に直結する資料についてはONKANウェブネットと連動させ掲載した。

年間購読だけではなく単刊購入も受け付けることによって、また、「夏の勉強会」「冬の勉強会」のテキストに活用することによって、販売部数を上げる効果は見られたが、年間購読数の増加には至らなかった。

有償年間購読者数：683名（平成22年度）〈平成21年度有償購読者数：718名〉

#### ・平成22年度特集テーマ

Vol.1（4月発行）：「鑑賞指導で子どもは何を身に付けるか」

Vol.2（7月発行）：「『我が国や郷土の伝統音楽』の指導」

Vol.3（10月発行）：「よりよい鑑賞の授業を求めて

～指導計画をどのように工夫するか」

Vol.4（1月発行）：「新しい学習評価（1）

～音楽科におけるこれからの評価の方向」

### 2. 書籍発行

平成22年度は、下記書籍を出版した。

#### ・「戦後音楽鑑賞教育の流れ」

山本文茂著：月刊「音楽鑑賞教育」平成21年度連載掲載を再編

#### ・音楽教育研究報告第26号

「子どもが音楽のよさを感じ取り、豊かに聴き合う音楽科学習」

～一人ひとりの思いや願いを音楽活動に結ぶ鑑賞指導の工夫～

北九州市立日明小学校（平成19年度研究助成の部入選）

#### ・音楽教育研究報告第27号

「豊かな感性の育成をめざす音楽鑑賞指導の研究」

～ICT機器を活用した音楽科指導、電子黒板を使って～

熊本県中学校教育研究会音楽部会（平成20年度研究助成の部入選）

## 《松本記念音楽迎賓館》

松本記念音楽迎賓館を会館として運営する事業は、財団の目的に見合った公益事業である音楽鑑賞の場として利用していただくことにあるが、建物や庭園の特徴を生かし、その他用途の貸し館としての利用も受付けている。

当期の利用実績は、予算1000万円に対し783万円に留まった。これは前年対比で見ても83%と一昨年度の水準に下がったことを示す。当期中にこの傾向を掴み、年度末に挽回を図ったが、東日本大震災の影響があった3月の利用は平時にも満たないまま当期を終了した。

利用区分別にその結果を分析する。

- ① スポンサー企業による研修利用額が対前年54%と落ち込んだこと。
  - ② 演奏会、懇親会目的での利用数は増加したが、利用金額が対前年86%だったこと。
  - ③ 撮影会場としての利用が利用数は横ばいであったが、金額が対前年70%だったこと。
- これらの原因として、研修利用の減少は、ひとつの研修シリーズが完了したことと、スポンサー企業が経営再建中であるため、最低限の研修しか入らなかったことが響いた。また利用数が増えながら金額が落ちたのは、リピーターなどが当館の使い方に慣れてきて、最小限の部屋の利用に留めることで出費を抑えに掛かっているのが要因である。今後、利用単価を上げていくには、会館利用者が主要ホール以外の部屋を合わせて利用をしやすいような料金体系への検討が必要と考える。

なお、研修利用の減少は期初より予想できたことでもあり、当期は、ブライダルへの貸し館利用の開拓を図った。しかしながら、大手企業と組むことは、土日における音楽演奏や鑑賞という本来の目的を妨げることに繋がるため、融通の利く個人のブライダルプランナーにこの利用促進を委ねた。しかし結果としては、個人業では営業力が及ばず、現在まで一組も成立していない。これが予算割れの大きな要因となった。

この度、当財団は公益財団法人の認定を受けることで公益目的事業のみならず会館の諸施設貸与という収益事業を行なっていくことが明確になっており、今後は、より積極的なブライダル事業の誘致や茶会などの開催に取り組み、会館の有効利用を高めていきたい。

この他、当期は、緑の環境を守る活動の事業化を図るため、地球の緑再生寄付講座を担当する専門家による庭園の樹木調査を行った。

以上。